

# 二十世紀以降の中国本土における中国文学研究

——日中文化交流との関係を兼ねて——

章 培 恒  
林 雅 清(訳)

中国文学の研究に関しては、当然のことながら、中国本土の学者に有利な条件が揃っている。しかし、二十世紀の中国本土における当分野の発展に鑑みると、その得失は対外文化交流と密接に関係していることがわかる。そして、日中文化交流は、中国の対外文化交流のきわめて重要な構成部分をなしていることから、中国本土における中国文学研究に対する影響も極めて大きい。筆者は、このことについていささか分析を加えることによって、国際文化交流が中国の文化・伝統に関する研究に与える意義について、一つの解釈を提示したい。

一

中国における中国文学研究が二十世紀に獲得した最も根本的な成果は、研究理念と研究方法の現代化であり、それによって、研究内容の面でも大きな飛躍を遂げた。具体的には、主に以下の四点が挙げられる。第一に、文学を政治

一

的教化の道具とする伝統的観念から脱却し、文学は言語を用いて美的感覚を備えた人間性を表現するものである、と考えられるようになり、そのことによって、文学の発展を人間性と美的感覚の総合的な発展と見なすようになったこと。文学批評においても、これを基準とするようになる。第二に、文学において、小説や戯曲を軽視するという伝統的観念を改め、それらを詩文と同等の価値をもつものとして位置づけたことと、同時に「書かれたもの」全体を文学と見なす伝統的理念を改め、「書かれたもの」の中でも文学作品とそうでない文章に区別されるようになったこと。

第三に、文学史という概念が確立し、中国文学発展の歴史に対して体系的な整理と研究が行われはじめ、「中国文学史」という学問分野が打ち立てられたこと。そして、「中国小説史」、「中国戯曲史」、「中国文学批評史」、「民間文学史」（およびこれに類する「俗文学史」というような専門分野が設けられたほか、中国の古典文学と現代文学との関係に、注目と検討が加えられはじめ、一九五〇年代より「中国現代文学」という学問分野も設けられたこと。第四に、実証を基本とした、作家や作品に関する斬新な研究が数多く生まれたこと。これも、中国の伝統的な研究では見られなかったものである（かつては作家の年譜と伝記、そして感覺的な批評に偏ったものしかなかった）。以上、主要な点のみを挙げて述べてきたが、例えば昨今展開されつつある文体研究など、言及しなかった面もまだいくつか存在する。

中国における中国文学研究の中では、長い歴史をもつ古典文学の研究が大きな比重を占めているが、現代文学に対する踏み込んだ研究がなされなければ、古典文学研究の総合的考察にさらなる根拠を提供することはできない。仮に、その研究成果について時代順に述べてみる。上述の新しい体質の文学研究のうち、最も早く出現したのは作品研究であり、一九〇五年の王国維（以下すべて敬称略）の『《紅樓夢》評論』が、その早期の代表的傑作である。王国維は

ショーペンハウアー（叔本華、Arthur Schopenhauer）の哲学思想と美学理論によって、『紅樓夢』の意義と価値を明らかにし、さらに深く掘り下げている。一九二〇年代より、胡適もまた『《水滸伝》考証』や『《紅樓夢》考証』などの論著を相継いで発表し、現代的観念でもって古代の作家や作品に対してなされる専門的研究にさらなる発展をもたらした。その後、陳寅恪の『元白詩箋証稿』や『論再生縁』が、この方面の研究を更なる高みへと押し上げた。次に、中国文学史に関する著作の出現である。一九〇四年の林伝甲の『中国文学史』が最も早いが、これはまだ厳密な意味での文学史とはいえない。なぜなら、そこにはあまりにも多くの非文学的なものが含まれており、逆に小説や戯曲などが取り入れられていないからである。一九〇七年より次々と出版された黄人の『中国文学史』が、比較的厳密な意味での文学史に関する最初の著作といえよう。そして、一九三二年の鄭振鐸『插图本中国文学史』の刊行、一九四〇年と一九四九年の劉大傑『中国文学發展史』上・下冊の刊行に至って、はじめて中国文学史という分野が確立する。三つ目は、中国文学史の各専門分野における成果である。王国維は一九一三年に『宋元戯曲史』を完成させ、魯迅の『中国小説史略』上・下冊は一九二三年と一九二四年にそれぞれ刊行された。これにより、『中国戯曲史』と『中国小説史』の両分野が正式に成立する。一九三四年には、羅根沢と郭紹虞が前後して『中国文学批評史』という同名の書（羅氏の著作は六朝まで、郭氏の書は上巻で北宋まで）を著した。さらに一九四四年、朱東潤の『中国文学批評史大綱』の出版によって、先秦から清末に至る文学批評の發展の過程が、初歩的な整理ながらはじめて系統立てられる（陳鐘凡が一九二七年に出版した『中国文学批評史』も清代まで言及されているが、全文で七万字程度の分量にすぎない）。このほか、北京大学の一部の教員と学生たちが一九二〇年代より歌謡の収集・研究を開始し、その成果を発表したが、これが民間文学研究の端緒となる。四つ目は、現代文学の研究である。一九三二年に周作人が著した

『中国新文学的源流』は、中国現代文学の主流——新文学の出現と古典文学の発展を関連付けて考察しており、中国古典文学の研究に新たな道を指し示し、同時に現代文学研究にもその意義について大いに啓発している。一九三五年には、胡適・魯迅・郁達夫・周作人らによってそれぞれ別個に編纂された『中国新文学大系』が出版され、これによって中国現代文学研究の基礎が確立される。特に、『中国新文学大系』は毎巻の巻頭に序文が附されており、まさしく曹聚仁のいうように、各巻の序文を「統合して一冊の本にすれば、現代中国新文学の格好の総合史になるであろう」<sup>(1)</sup>。

これらの著作が世に出た時期から考えると、中国における中国文学研究の方向性の確立とそれぞれの研究領域の基盤は、一九二〇～三〇年代にはすでにほぼ完成していたといえる。その後は、これらの基盤の上にさらなる発展が見られるようになる。例えば、陳寅恪が一九五〇年代以降に完成させた『元白詩箋証稿』と『論再生縁』は、作家・作品研究を新たな高みへと押し上げ、一九四〇年代後半に劉大傑の『中国文学發展史』が出揃うと、中国文学發展の筋道を『挿図本中国文学史』よりも一層明確に指し示すことになる。また、一九四四年に朱東潤の『中国文学批評史大綱』が出版されると、ようやく中国においてほぼ完備した中国文学批評史の著作が存在することとなる。これらの成果はすべて、一九二〇～三〇年代における研究原則や研究方法の探究化を示している。

しかしながら、二十世紀の中期から後期にかけての三十年余りの間に、中国における中国文学研究は、一度停滞ないしは曲折を迎え、創造性にも欠けてくる。むしろ、それでもなお若干の進展は見られる。例えば、先に挙げた劉大傑の『中国文学發展史』下冊や、陳寅恪の『論再生縁』などのほか、錢鐘書の『宋詩選注』や夏承燾の唐・宋詞の研究などがある。ただ、総体的な成果からすると、すでにそれ以前のような発展は見られなくなっていた。

一九八〇年代からは、中国における中国文学研究に、また新たな活路が見出され、あわせて大きな成果が得られる

ようになる。ただ、時期が近く、すべてがまだ進展中であるため、ここでは筆者が特に注目すべきであると認識するものについて、いくつか紹介するに止めておく。まず一点目は、中国現代文学の研究が、『中国新文学大系』の伝統を引き継ぎ、文学そのものから入念に実証していくという方法を回復したということである。その代表的著作に、銭理群らの『中国現代文学三十年』、洪子誠の『中国当代文学史』、陳思和の『中国当代文学史教程』などがある。二点目は、中国古典文学研究において、羅宗強を筆頭に、二つの研究領域、すなわち、文学思想史と文人心態（心理）学が開拓されたということである。文学思想史とは、文学理論と文学創作との間に表れ出る文学思想を総合的に研究する学問で、文人心態学とは、各時代の文人の心理状態とその変遷を探り出し、文学研究発展の一視点とする学問である。三点目は、文学を、言語を用いて美的感覚という人間性を表現するものであると見なす観念が、さらに徹底されてきたということである。この観念は、一九二〇～三〇年代にすでに形成されていたが、常に批判にさらされ、その後相当長い期間に亘って反動的な見方と見なされてきた。しかし今日では、中国古典文学研究においてもすでに幾人かの学者がこれを用い、大いに反響を得ている。その代表作として、章培恒・駱玉明主編の『中国文学史』および『中国文学史新著』（増訂本）がある。四点目は、王運熙・顧易生主編『中国文学批評通史』などのような、中国文学（文学批評を含む）史料の大規模な収集とその整理である。五点目は、大型の文学文献の収集ないし編纂事業である。その最も代表的なものとして、傅璇琮・安平秋・孫欽善主編の『全宋詩』が挙げられる。もちろん、曾棗庄等主編の『全宋文』はさらに膨大なスケールのものであるが、これは総合的な文献整理であるといえよう。

以上、はなはだ不十分ではあるが、研究成果の多くは作家・作品あるいは文学現象の個別のテーマに関するもので、そういった成果をすべて挙げるとなると、自ずと偏ってしまうという難点がある。したがって、王国維や陳寅恪とい

った学界の大家の論著などを例に挙げることによって説明するに止めた。

## 二

ここで、中国における中国文学研究と、対外文化交流との関係、さらに日本の中国文学研究との関係について、簡単に紹介しておく。

明清時代、中国の社会的発展は、しばしば中断を余儀なくされる。十九世紀末に至ると、中国の文化と世界の文化の発展の度合には相当大きな隔たりが見られるようになり、積極的に外から文化的栄養を吸収するほかなかった。その吸収先は、一つが欧米、もう一つが日本であったが、地理的・文化的に近い関係にあったことから、当初は日本から吸収するもののほうが、欧米から直接吸収するものよりも多かった。しかも、中国文学の研究においては、当時の日本人学者の成果は、数の上でも質の上でも欧米の学者の成果をはるかに超えていた。したがって、中国本土の中国文学研究に与えた影響も、後者に比べてより深く広範囲に及ぶものであった。

まず、中国文学史の研究から見えていくことにする。中国人の手になるはじめての中国文学史に関する著作——林伝甲『中国文学史』の巻頭の語の中では、「わたしが本書を編纂したのは、日本の笹川種郎たねお『中国文学史』の意図に倣うることである」と表明されているが、本書の内容は雑然としており、厳密な意味での文学史の著作とはいえず、笹川の影響を受けているようには見受けられない。この言葉は、林伝甲が勝手に自画自賛しているだけのものである。本書は、京師大学堂（北京大学の前身）での講義録であり、当時政府が頒布していた『奏定大学堂章程』の中に、大学では「中国文学」の科目を開設しなければならないという規定があり、あわせて「日本には中国文学史があるが、

その意図するところに倣い、自ら編纂して教授すべし<sup>(2)</sup>』としている。林伝甲の言葉は、おそらく彼の講義が『章程』の規定に則っていることを表明するためのものにすぎないと考えられる。

だが、この林伝甲の書の後に著された黄人の『中国文学史』は、確実に先行する日本人学者の同類の著作の影響を受けているといえる。なぜなら、黄人は日本語を解したし、中国文学の時代区分に、日本人学者の中国文学史の歴史区分法を採用しているからである。と同時に、本書は、文学に関する定義は今日ほど明確ではないにせよ、林伝甲の書とはもはや同日の論ではない。黄人がこの『中国文学史』を作成していた頃、中国の学术界では文学と非文学の境界がはっきりと区別されておらず、かつまた戯曲や小説を軽視し、一顧だに値しないものとされていた。林伝甲が多くの非文学的なものを取り入れたにもかかわらず戯曲や小説を含めなかったのは、中国のこの伝統的な文学概念に沿ったゆえであった。そして、黄人のこの方面における水準は、実に当時の中国学术界の水準を大きく上回っていたのである。しかし、日本人学者の中国文学研究について見てみると、笹川種郎（臨風）の『支那文学史』（一八九八年、博文館）、久保天随の『支那文学史』（一九〇三年、東京人文社）などでは、文学と非文学について、すでに文学（literature）の定義に符合する分類をしており、笹川の書には小説や戯曲が、久保の書にはそれに加えて詞まで、含まれていた。黄人の『中国文学史』における文学史の時代区分が、日本人学者の中国文学史の歴史区分法に影響されていることから、彼の文学の定義に関する理解も、やはり日本人学者の中国文学史研究を参考にしていたと考えられよう。

鄭振鐸の『插图本中国文学史』は、黄人の『中国文学史』から二十年余り経った後に出されたものであり、文学史の時代区分については具体的な区分法に異なる面もあるものの、黄人のモデルを踏襲しているといえる。しかし、劉

大傑の『中国文学発展史』では、これを王朝区分法に改めており、この方面における日本人学者の影響はなくなった（そのまま一九九〇年代に至るまで、古代・中世・近世・近代という文学史の区分法は、中国における中国文学史研究の中には現れなかった）。ただ、日本の早稲田大学に留学していた劉大傑は、一方では日本人学者の中国文学史研究の精髓を、自身の中国文学史研究に取り入れていたのである。彼は、自身の文学史観の形成について、「文学理論において、私に最も深く影響を与えたのは、……以下の数点である。一、テーヌ（泰納、Hippolyte Adolphe Taine）の『芸術哲学』や『英国文学史』……」<sup>(3)</sup>と述べているが、日本では、テーヌの学説によって中国文学史が研究されはじめたのは十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのことであり、数多くの重要な成果が生み出されている。劉大傑がテーヌの『芸術哲学』や『英国文学史』を、自身の文学史観を打ち立てた著作の代表としたのは、まさに日本留学における収穫であろう。

次に、二十世紀の中国文学研究に最も功績のあった五人の学者——王国維・魯迅・胡適・陳寅恪・周作人——と、日本の中国文学研究との関係について見ていく。胡適がアメリカに留学し、デューイ（杜威、John Dewey）のプラグマティズム（実用主義）の影響を受けたことは、ここでは触れない。陳寅恪もアメリカに長期留学したが、若い頃（一九〇四〜〇五年）に日本に留学しており、病を得て中途退学するものの、日本の中国学研究については相当深い知識を有していた（後述の「王観堂先生輓詞」およびその注釈参照）。しかも、その中国文学研究に関する論著の中で、「物語」という言葉がよく用いられている（例えば、『元白詩箋証稿』第一章の「長恨歌」についての論説のなかで何度使われている）。実は、これは日本語の「ものがたり」の漢字表記であり、中国語の中にはこのような用法は存在しない。したがって、彼の中国文学研究もまた、日本の中国学に縁がないとは言えない。



王国維が『《紅樓夢》評論』を書いたのは、そもそもショーペンハウアーの哲学に端を発するものであり、しかも、彼が読んでいたのは英語のテキストであったという。だが、彼も若い頃日本に留学しており、その日本留学以前に、藤田豊八（劍峰）から日本語を学んでいた。さらに、辛亥革命の後に再度日本を訪れ、日本の学界と多くの接触を持っていた。ゆえに陳寅恪は、「王觀堂先生輓詞」（附注釈）で次のように述べている。

……觚稜を回望すれば涕泗漣たり、波濤に重ね泛ぶ海東の船（注：先生は若い時分日本を訪れており、清皇帝が帝位を譲った後に、羅叔言に従って再び日本を訪れた）。……東国の儒英誰か地主ぞ、藤田狩野に内藤虎（注：日本人藤田豊八、狩野直喜、内藤虎次郎。内藤の別号は湖南。羅先生がかつて上海に東文翻訳社を設立し、藤田豊八を招聘して日本語を教えさせていた。先生は彼に就いて学んでいた。この句、三人のうち藤田が最初に置かれているのは、ひとり音韻の関係のためだけではない。また、内藤虎が三番目にあるのは、虎の字が韻字になるためであり、三人の中では内藤虎の学問が最も優れていた<sup>(4)</sup>）。

この三人の日本人学者のうち、王国維が最初に接触した藤田豊八こそ、日本で最も早い時期にテーヌの学説を用いて中国文学史を研究した、影響力のある学者の一人であり、一八九七年にはその『支那文学史稿・先秦文学』（東華堂）が出版されていた。この書の「序説」「（一）文学史考覈の方法」の中で、「蓋し時は歴史の経なり、外圍は歴史の緯なり、人間の特性は此経緯に縁りて一種の歴史的現象を織り出すものなり。文学の史に於ても亦た然らざる可らず。而して文学なる現象に対して之に歴史的考覈を加へんには単にその現象によりて国民の思想感情の推移を闡明するを以て足れりとす可からず」と述べており、「されば余は時と外圍と人とを觀察し文学なる現象に対してその想と形との変遷推移を叙し以て支那文学の幽光を發揮するに務むべし」と言っている。「外圍」とは環境のことを指している。

また、「想」は内なる要因、「形」は外に現れた現象のことであり、文学作品が包含している思想や感情と、そういう思想や感情を具体的に表している作品の様相を、それぞれ指していると考えられる。これこそが、テーヌの学説の中国文学史研究への運用である。と同時に、藤田は中国文学史研究において、小説・戯曲を重視する風潮を起こした最も影響力のある学者の一人でもある。一八九七年五月に出版された古城貞吉の『支那文学史』では、まだ小説・戯曲には言及されていないが、藤田豊八が一八九五〜九七年に講義した東京専門学校文科の「支那文学史」では、後漢までであったにもかかわらず、「小説の萌芽」という一コマが設けられていた。藤田が笹川種郎・田岡嶺雲・白河鯉洋・大町桂月らと編纂した『支那文学大綱』（一八九七〜一九〇四年）の中では、さらに小説・戯曲作家の李漁や湯顯祖らの項目まで設けられている。そして、笹川種郎の『支那小説戯曲小史』（東華堂）も一八九七年に出版されており、その中で「支那文学の特色なるは此に在り」と認めている。<sup>(5)</sup>

このように、藤田豊八は中国文学研究において多大な業績を収めた学者であるゆえ、王国維の彼との交友関係は、若い頃に彼から日本語を学んだためだけとは言えまい。陳寅恪の「東国の儒英誰か地主ぞ、藤田狩野に内藤虎」という句からも、王国維が辛亥革命の後、再び日本を訪れ日本で暮らした期間、やはり藤田が最も親密に交際した日本人学者の一人であったことがわかる。よって、王国維が藤田から受けた影響は、必然的に多方面にわたってくる。例えば、『屈子文学之精神』の中の一文で、中国古代の思想・文学を南北二派に分けているのも、藤田の『支那文学史・先秦文学』「序論」の中国思想・文学に対する考察の一視点である。むろん、中国南北文学の具体的特徴や優劣に関しては、王国維と藤田では視点が異なるものの、その出発点は同じである。また、王国維の『《紅樓夢》評論』での『紅樓夢』の文学的意義・価値の分析理論は、ショーペンハウアーの哲学に基づくものではあるが、『紅樓夢』を最

も優れた文学作品であるとしたのは、明らかに日本人学者（藤田を含む）が中国の小説・戯曲に文学史上の高い地位を与えたことに関係している。また、王国維が『宋元戯曲史』の中で元曲に相当高い評価を与えているのも、同じことである。注目すべきは、王国維の『宋元戯曲史』の執筆および完成が、ちょうど辛亥革命の後に日本で生活し、藤田・狩野・内藤ら日本人学者と深く交わっていた時期に重なるということである。

魯迅・周作人兄弟に至ると、このような状況はさらに顕著になってくる。周作人が日本文化の影響を強く受けていることはいうまでもないが、魯迅の文学思想も、やはり日本に留学していた時期に形成されたものであり、厨川白村の『苦悶の象徴』における見方に賛同している。魯迅はこの書を翻訳したわけではないが、北京大学における文学理論の講義の教材とした。彼はその後、マルクス主義の文芸観を受け入れるもの、「よき文芸作品は、従来、ほとんどが命令を受け付けず、利害など顧みず、心の中から自然に湧き出てくるものである」という観点を堅持し続けていた。ただ、この「もの」は一樣に階級性を帯びたものとして認識してはいたが。中国文学の研究史上、魯迅と日本人学者の研究との間にも、密接な関係が存在する。魯迅の『中国小説史略』と王国維の『宋元戯曲史』は、ともに笹川種郎の『支那小説戯曲小史』の後十数年経ってから書かれた。すなわち、当時の日本における中国文学研究者の間では、早くも中国の小説・戯曲を重視する風潮が形成されていたということである。魯迅が藤田や笹川らの影響を受けていたかどうかはわからないが、日本人学者が中国の小説を重視していたことは知っており、また賛同もしていた。例えば、塩谷温しおのやおんの『中国文学概論講話』は、小説を中国文学の重要な構成部分として位置づけているが、魯迅は一九三三年十二月二十日の曹靖華に宛てた手紙の中で、「中国文学の概論は、やはり日本の塩谷温の『中国文学講話』がわかりやすい」と書いていることから、魯迅は、中国文学についての系統だった概論的な論著で最も注目すべきもの

はこの書であると考えていた、ということがわかる。しかも、彼は『中国小説史略』を執筆するに当たり、明らかにこの書を参考にしている。<sup>(8)</sup>このほか、魯迅は日本人学者の中国文学に関するその他の研究にも注目し、その優れた点を吸収している。例えば、魯迅は一九二七年に書いた「魏晉風土及文章与藥及酒之關係」の中で、曹丕の『典論・論文』の「文は気を以って主と為す」、「詩賦は麗を欲す」などの言葉を引用し、一步進めて「近代の文学的観点から見れば、曹丕の時代は『文学を自覚した時代』といえるだろう」と述べているが、魏の時代を「支那の文学上の自覚時代」と位置づけるのは、実は鈴木虎雄の『支那詩論史』（一九二五年）に始まる。しかも、この書は、一九一一年から一九一九年にかけて鈴木自身が雑誌『文芸』に発表した関係論文を集めて整理したものである。日本の中国文学研究に詳しくあった魯迅が、一九二七年の時点でこれを知らなかったはずはない。それに、魯迅は「近代の文学的観点から見れば」といつているが、この「近代」の意味するところは、すでに普遍的な考え方となっており、彼独自の見方ではない。すなわち、魯迅がここで鈴木虎雄の説を実際に引用していたとしても、それは学生向けの講義中のことであり、彼自身が気づかなかっただけなのかもしれないということである。鈴木虎雄のこの論断は、魯迅による引用を経て、中国の古典文学研究界に多大な影響を及ぼし、現在でもなお多くの学者に支持されている。

要するに、胡適や陳寅恪のみならず、王国維や魯迅、周作人らはみな、対外文化交流を通じて、外国からたくさん有益な学術上の栄養を吸収してはじめて、自身の研究において大きな貢献を成したということである。ただ、その吸収先が、それぞれ異なっているだけにすぎない。もちろん、彼らの研究成果も、国外の学者に重要視され、支持されている。また、彼らは国外からの栄養を吸収するとともに、努めて中国の学術的伝統における優れた点を継承しようとしていた。ただ、このことは本論の範疇からは逸れるため、ここでは詳述しない。

一九四〇年代より、戦争という環境が引き起こした物質生活の困窮や対外文化交流の支障によって、中国文学研究もそれ以前のような発展は難しくなったが、それでもわずかながらの進歩は見られた。しかし、一九五〇年代後期より二十年余りの期間には、明らかに中断が見られる。例えば、陳寅恪が一九五〇年に著した『元白詩箋証稿』はまだ正式に出版されていたものの、一九五四年二月に書いた『論再生縁』は、彼の生前に出版社から正式に出版されることはなく、自費によってガリ版で若干冊刷り、親しい友人に贈ることしかできなかった。このような状況下では、当然のことながら対外文化交流が正常に行われることはなく、しかも、それ以前に吸収した有益な栄養すら極力排除しようとする動きもあった。胡適が全国的に批判を受けたのは、その政治的立場に関係があったためかもしれないが、劉大傑の『中国文学發展史』のような著作でさえも、声高に批判され、たびたび書き改めざるを得なかったことに鑑みれば、当時の學術の動向がうかがい知れるというものである。

劉大傑の『中国文学發展史』に対する大規模な批判は一九五八年に始まり、最終的には劉大傑が自己批判する形となった。その「批判《中国文学發展史》中的資産階級學術思想」と題する批判文の中で、彼は「資産階級學術思想」の形成過程を省みて、「文學理論において私が最も強く影響を受けたものは、……以下の数点である。一、テーヌの『芸術哲学』と『英国文学史』。二、ランソン（朗末、Gustave Lanson）の『文学史方法論』。三、フレッチャー（佛里契、Joseph Fletcher）の『芸術社会学』と『欧州文学發展史』。四、ブランデス（勃蘭兌斯、Georg Morris Cohen Brandes）の『十九世紀文学主潮』<sup>(10)</sup>と記している。ここに列挙されている著作は、すべて当時の「資産階級學術思想」

の典型とされていたものであり、これらの影響は一掃しなければならぬとされていた。これこそ、二十世紀初頭より中国の学术界が国外から吸収し続けてきた学術上の栄養が、尽く排斥されたことを意味している。一九六〇年代に刊行された『中国文学発展史』の修訂版では、多くの内容が増補され、資料的な誤りも数多く訂正されているが、上述の「資産階級」的な思想は、ほとんど取り除かれてしまった。だが、それでも足りなかったのか、「文化大革命」の時期には、劉大傑はこの書のさらなる「修改」を命ぜられている。彼は極力引き延ばそうとしたが延ばしきれず、結局一九七〇年代に二冊の新たな修訂本が出版された。それは、「儒法闘争」の観点から文学作品を批評することを基本としており、一九六〇年代の版よりさらに後退している。まさしく、知識人たちの悲劇である。

しかし、このような厳しい環境の中でも、中国の学术界がそれまで吸収してきた国外からの栄養は、ほんの一部ではあるが残されていた。その一点目は、魯迅が当時偶像化されており、彼の著作がもとより批判を受けなかったことである。魏が中国文学の自覚の時代であるという鈴木虎雄の観点すらも、魯迅の意見として広まり続けていた。二点目は、王国維の文学研究に関する著作である。彼は学術上の地位が高かった上、彼の生涯における学術活動のうち中国文学研究はその一部分にしかすぎず、その他の学術論著もまた専門を極めており、批判や否定はされ難かった。その学術的地位を根本からひっくり返すことができない以上、彼の文学研究だけを批判しても大した意味はなかった（当時、いくつか批判の文章はあったが、大きな影響は及ぼさなかった）。三点目は、わずかながら一九二〇～三〇年代から学術研究に従事していた学者が、自身の基本的観点到修正を加えることを望まず、特殊な縁によってかつての著作を再版し、また、さまざまな具体的事由によって批判者の目を逸らさせ、一定期間のうちに普及させることができたケースがあったことである。例えば、朱東潤の『中国文学批評史大綱』である。彼はイギリス留学生であった

ため、この書には他の中国文学批評史の著作よりもさらに多くの「資産階級學術思想」が含まれていたものの、文言で書かれていたため、その論述は簡素にして意味深長であった。なおかつ、勇敢で見る目のあった一人の出版者——中華書局上海編輯所（後の上海古籍出版社）責任者の李俊民によって、再版されることとなる。しかも、「文化大革命」勃発に至るまで、一度も批判されることがなかった。これらの要因が合わさることによって、ついには中国における文学研究にわづかばかりの活力が残り、それがその後の振興の必要条件となるのである。

一九七〇年代末から八〇年代初頭にかけてより、中国文学研究を含む學術研究が再び興隆し始め、かつての多くの価値ある著作が再刊されるようになる。さらに重要なことは、學術研究が二十世紀前半の四十数年間における伝統を恢復しただけでなく、さらなる発展が見られるということである（具体的な状況は上述している）。研究者のレベルは、いまだ先学を超えてはいないが、その研究作業については、先学の基礎からは一歩進んだものとなっている。

このような過程の下、中国文学研究の領域における対外學術交流も、新たに発展しつつある。その一端についていうと、まず、多くの国外の研究論著が中国で翻訳出版されていることである。これは以前と同様、日本の研究論著が欧米のものよりも多い。一方、まだ中国語に翻訳されていない国外の多くの研究論著が、中国の学者によって重要視され参考にされているということもある。もう一つは、講義や訪問、国際學術シンポジウムなどを通じて、たくさん国外の学者が中国を訪れ、學術交流に従事しているということである。これについては、一九四〇年代以前に比べるかに増加している。なお、最近の情勢下では、アジア諸国の学者のほうが西洋諸国よりも多い。また、同時に中国人学者も、しばしば国外に赴き講義や訪問をしたり、學術シンポジウムに参加したりしており、その論著は国外においても相応の注目を集めている。

このような学術交流は、中国における中国文学研究に対して力強い促進作用がある。一九七〇年代末から八〇年代初頭に始まった中国文学研究の振興は、中国元来の学術的伝統の発揚に由来し、対外学術交流を通じて誘発された現代における世界の学術研究との接触にも由来しているといえよう。特に、中国文学の研究にとっては、常に日本の中国文学研究が中国人学者の主要な参考ツールとなっている。むしろそれは、学術思想や研究方法であったり、具体的な課題の研究であったり、資料の発見などであったりする。およそ価値のあるものはすべて、プラスの影響を生み出すものである。このような例は、まさに枚挙にいとまがないが、ここでいくつか、関西大学に関連する例を挙げておく。まず、伊藤正文教授の長編論文「日中文学比較研究」（復旦大学中文系での講義録）は、翻訳され『中国文学研究』第一輯（江西教育出版社、一九九九年）に掲載されてから、中国文学研究者と日本文学研究者に大いなる啓発を与えた。また、井上泰山教授が明の嘉靖年間の葉逢春本『三国志通俗演義志伝』をスペインで発見、整理出版し、さらに関係する論文を発表すると、中国の『三国志演義』研究にも大きな促進作用を生み出し、『三国志演義』の一連の問題に対して新たな考察を導き出した。そして、森瀬壽三教授の『唐詩新攷』における唐の李白らの詩に対する緻密な考証もまた、中国人学者の研究に対して啓発している。筆者が駱玉明教授と共同で主編した『中国文学史新著』（増訂本）（復旦大学出版社・上海文芸出版総社共同出版、二〇〇七年）の中でも、井上教授と森瀬教授の上述の論著を、学術上の重要な発見であるとして引用させてもらっている。

## 注

- (1) 『文壇五十年』続集、一七二頁、香港新文化出版社、一九七三年。  
 (2) 陳広宏「泰納的文学史観与早期中国文学史叙述模式的構建」、復旦大学中文系編『卿雲集続編』、四七一〜四七二頁、



上海古籍出版社、二〇〇五年参照。

(3) 劉大傑「批判《中国文学發展史》中的資產階級學術思想」、《中国文学發展史》批判』所収、中華書局上海編輯所、一九五八年。

(4) 「王觀堂先生輓詞」が収録されている『寒柳堂集』（上海古籍出版社、一九八〇年）には、「寅恪先生詩存」という附録があり、次のような注釈が加えられている。「癸巳の年の秋に広東を訪れ、師と語り合った際、しばしば晚清期の故事と、この詩の関連する箇所の話が及んだ。帰ってから聞いたところによって、詩句の下に注釈を附した。甲午の年元日の夕べに補記す。」したがって、この注釈は「寅恪先生詩存」の編者である蔣天枢が付け加えたものではあるが、陳寅恪自ら述べた言葉に基づいているということがわかる。

(5) 本論における、藤田豊八・笹川種郎ら日本人学者の中国文学研究の業績については、すべて陳広宏教授の「泰納的文学史観与早期中国文学史叙述模式的構建」によるものである。

(6) 「革命時代の文学」、『魯迅全集』第三卷、四三七頁、人民文学出版社、二〇〇五年。

(7) 「致曹靖華」、『魯迅全集』第十二卷、五二三頁、人民文学出版社、二〇〇五年。

(8) 「不是信」、『魯迅全集』第三卷、二四四頁、人民文学出版社、二〇〇五年。

(9) 「魏晉風度及文章与藥及酒之關係」、『魯迅全集』第三卷、五二六頁、人民文学出版社、二〇〇五年。

(10) 「批判《中国文学發展史》中的資產階級學術思想」、《中国文学發展史》批判』所収、中華書局上海編輯所、一九五八年。

【訳者補記】本稿は、二〇〇六年一月二七日に開催された関西大学創立一二〇周年記念講演会「中国学の展開と関西大学」における章培恒教授の基調講演「中国的国学发展——以中国的本国文学研究的发展为中心」をもとに、章教授ご自身が筆修正された原稿「二〇世紀以来中国本土的文学研究——兼述其与中日文化交流的关系」を翻訳したものである。